様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　18 日現在

機関番号：33109
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21792242
研究課題名（和文）　死後のケアからデザインする終末期患者と家族を尊重した看取りに関する研究
研究課題名（英文）　A Study on the Terminal Care Designed from the Viewpoint of Posthumous Care with Full Respect for Patients at Their End of Life and Their Families
研究代表者
小林　祐子　（KOBAYASHI　YUKO）
新潟青陵大学・看護福祉心理学部・准教授
研究者番号：20303232

研究成果の概要（和文）：
本研究では、看護師と葬祭業者を対象にした医療施設で行われる死後のケアに関する実態調査から、グリーフケアにつながる看護基礎教育での看取りの教育内容を検討することを目的とした。その結果、遺体管理などの看護師の知識と技術の習得、葬祭業従事者との連携、家族の参加時の配慮と説明の必要性が明らかになった。実際に身内の処置を体験した家族の調査もふまえて、死後のケアを含めた看取りに関する DVD 教材を作成したところ、講義だけでなく演習前に DVD で処置の流れを学習することが看護学生の理解につながることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：
Based on a field survey targeting nurses and funeral operators on posthumous care practiced at medical institutes, this paper aims to discuss the education contents concerning the terminal care, with a focus on grief care, as a part of fundamental nursing education.
As a result, the study has uncovered the needs: (1) to equip nurses with knowledge and skills on mortuary care; (2) to cooperate with funeral company workers; and (3) to be thoughtful towards the bereaved family members and explain them properly at their attendance. As a part of the research, we have prepared a DVD on terminal care as well as posthumous care based on the survey including bereaved families' actual experiences on mortuary care of their deceased member.
It was suggested that the use of DVD to provide ideas on the treatment process before providing lectures may further enhance the nursing students' understanding on the subject.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	430,000	2,080,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：臨床看護学
キーワード：死後のケア　遺体管理　グリーフケア

１．研究開始当初の背景

緩和ケアはわが国の医療制度の中で、30

年余りの間に急速な発展を続けてきた。ハード面ではホスピス施設の増加やがん医療政策が制度化し、包括的ながん医療への取り組みが始動されたばかりである。医療の高度化に伴い、日本人の８割が医療施設で亡くなる中で、看取りの担い手が家族から医療者となり、日常生活から死が切り離され、人の死を看取った経験のない人が増加している現状がある。

がん終末期では、患者が残された時間を可能な限り安楽で、その人らしく過ごせるという QOL の向上に重点をあて、医療チームが家族をも含めた質の高い保健医療サービスを提供することが望まれる。人のいのちの終結、尊厳ある最期の迎え方は、当事者である患者や家族にとって最優先されるべき事柄である。しかしながら、ターミナルケア特に看取りに関しては、看取る側の専門職の関心が高い反面、症状緩和やスピリチュアルケアの充実など、ケアの質の向上も課題である。

看取りを文化的背景からみると、日本では仏教および民俗を基盤とした儀礼的行為が残っており、医療がいくら近代化しても看取りの文化は脈々と受け継げられている。近年、生命にかかわる諸問題（生殖医療、尊厳ある死）が大きな社会問題になるにつれ、医療の現場では死を語ることをタブーとせず、むしろ「看取り」が注目され始めるようになった。

人の死後、一般的にその身体の整容として「死後の処置」が行われてきたが、これまでの臨床では、死亡確認後に家族を患者から離して看護職が行ってきた。しかしながら、2004 年頃より従来の処置を遺体の変化というエビデンスを考慮し、死化粧のあり方を見直す活動が、小林らのエンゼルメイク研究会の提言により急速に臨床に広がっていった。遺族のケアを含めた広義の「死後のケア」は、単にスキルの見直しだけでなく、現代医療で残されている看取りを受け継いでいくことが可能であると言える。このように、看護として家族への援助を通して看取りを充実させ、次の世代に伝えていくには、看護職の意識やケアのあり方が重要な鍵になると考えた。

また、家族に対するケアでも、がん終末期では、臨終までの数日間は家族の疲労や緊張もピークに達するため、実践のうえでもその重要性が認識されるようになってきた。看護職が身体的苦痛の緩和を中心とした患者のケアだけでなく、亡くなるまでの全過程を通した家族への援助を行うことで、その後のグリーフケアプロセスにも大きな影響を及ぼす。現在日本で行われている死別後の悲嘆の援助については、主に欧米のプログラムを基にしたサポートケア、民間の自助グループ活動などがあるが、その必要性が指摘されている中でも臨床でのグリーフケアは十分とは言い難い現状である。グリーフケアが死別後からではなく亡くなるまでのプロセスから実施されるものであるならば、家族のケアを含めた死後のケアは、グリーフを支えるものとなりえるはずである。グリーフケアとしての死後のケアの重要性、看取りを包括的に検討するには大規模な量的・質的研究を行う必要性、臨床実践に適応できる死後のケアの教育を構築する必要があると考え、着想に至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、

１）看護職、葬祭業従事者や遺族への死後のケア調査から、看取りの実態とケアに影響する要因を明らかにする。

２）看取りの充実に向けた看護基礎教育過程での死後のケアのあり方を検討する。

３．研究の方法

本研究での主な調査に沿って、以下にその概要を記述した。

＜調査１＞看取りの場における看護職の死後のケアの思い

①対象の選定方法

死後の処置を業務として 3 回以上経験したことのある看護師を対象に、施設の部署責任者を通して選定した。

②実施時期

2009 年 10 月～2010 年 9 月

③方法および内容

先行研究をもとに死後のケアに関する思いや家族の参加、死後のケアの実施状況についてインタビュー調査を実施した。

④分析方法

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいて実施し、ターミナルケア研究者のスーパーバイズを受けた。

⑤倫理的配慮

新潟青陵大学倫理委員会の承認を得て実施した。書面と口頭による研究内容の説明、研究参加の自由意思、参加の拒否や途中辞退が可能なことを説明し、同意書に署名が得られた対象に実施した。

＜調査２＞医療施設で行われる死後のケアの現状と課題～葬祭業従事者への調査から～

①対象の選定

9 都道府県の葬祭会社および 24 都道府県の納棺士会社等 206 ヶ所において、業務として遺体に接したことのある 20 歳以上の葬祭業従事者を対象とした。

②実施時期

2010 年 12 月から 2011 年 5 月

③方法および内容
　無記名自記式質問紙調査で、医療施設からの遺体のトラブル状況、医療施設で行われる処置への意見、医療者との情報交換、家族の参加状況、感染予防対策などである。
④分析方法
　属性や感染予防対策、トラブルの状況についてχ^2検定、Wilcoxon の符号付順位検定を行い、危険率 5%未満を有意差があるとした。
⑤倫理的配慮
　対象に調査の趣旨、プライバシーン保護、調査の自由参加などについて文書で説明し、調査への協力が自由意思で参加できるように事業所ごとでなく、個別の返送法で調査者の元に調査用紙が届くようにした。調査用紙の返送をもって、同意を得たものとした。

＜調査研究３＞看護基礎教育での看取りに関する教育内容の検討
①調査時期　2011 年 8 月～2012 年 2 月
③方法および内容
　これまでの調査をふまえて教材の内容には、処置の流れだけでなく遺体の変化とその対応や家族への配慮を含めて試案を作成し、その過程では看取りの教育にかかわる看護教員やターミナル患者の看護の経験者と内容を検討し、修正した。
サンプルの DVD を看護学生に視聴してもらい、内容の理解度等について調査を行った。
③分析方法　単純集計およびクロス集計
④倫理的配慮
　DVD の視聴対象とした看護学生には、調査の趣旨を口頭および文書で説明し、研究に同意が得られた場合のみ実施し、本研究の協力による不利益が生じないことを説明した。

４．研究成果
＜調査１＞
①結果および成果
　インタビューの結果、16 のカテゴリーと 42 のサブカテゴリーが抽出された。看護職が行う死後のケアの基盤には、看護職の≪最後のケアに込めた思い≫、≪生前の深さが影響≫があり、≪その人の尊厳を守る≫ための配慮や≪きれいに整える≫ことを意識していた。その反面、≪避けたいという意識≫があり、≪制限時間内で見送る準備への負担≫、≪メイクの困難さ≫を強く抱えながらも、最期の場に立ち会うことを選ばれていると捉えることで乗り越えの姿勢がみられた。
また、家族に関しては≪家族参加がもたらすグリーフケア≫の意義を実感することで、≪自然なケア参加への後押し≫がされ、死後のケアに参加することがグリーフケアになると捉えていた。死後のケアは看護職にとっても≪別れの場としてのケア≫であったが、何度経験しても満足できる看取りにならないと感じていた。その要因として、死後のケアが特に病院文化の中で≪継承してきたスキル≫であるものの、患者の個々の状況によって画一化できるものではなく、エビデンスに基づく≪退院後の遺体の変化の知識不足≫を抱えていた。そのため、従来のケアの方法を見直して取り組む一方で、≪葬儀社との連携のなさ≫が死後のケアの課題であることが明らかになった。死後のケアに関する思いは看護師によって差がみられたものの、亡くなったその人を尊重することが共通して語られていた。どのような死の迎え方であっても、よい最後のケアになるようにと思いがこめられ、生前からのその人との関わりの深さが影響していた。死後も亡くなった人の尊厳を保つことに重きをおくため、施設で行うケアでは
きれいさやその人にあった最後の支度になるように意識していた。その反面、限られた時間や物品、人員の中で、準備を行う負担や自身の技術不足などによって避けたケアとして捉えていた。家族の参加がグリーフケアになると認識することで、死後のケアの際の家族へのケアを見直すことにつながっていた。

＜調査２＞
①結果および成果
　配布数 680 部、回収率 34.6%、有効回答数は 232 部であった。経験年数は 10 年以下 44%が最も多く、平均 15.7(±10.5)年、年間の葬儀または納棺件数は 100 件以上が 42.7%と多く、エンバーマーの有資格者は 4 人（1.7%）であった。
　退院後の遺体に関するトラブルの経験では、開口 216 人（93%）、開眼 213 人（92%）、髭剃り後の皮膚トラブル 75 人（32%）、出血トラブル 218 人（94%）の部位は、口、鼻、点滴抜去部の順であった。体液流出 212 人（91.4%）の部位は口、鼻、耳の順であった。一番多く見られたのは、開口 103 人、皮膚トラブル 74 人、体液流出 48 人、出血 41 人、悪臭 29 人、開眼 11 人の順であった。
　葬祭業従事者が医療施設で行ったほうがよいと考える処置では、太い点滴チューブ抜去後の縫合 186 人（80.2%）、死亡直後からの冷却 98 人（42.2%）、口腔ケア 203 人（87.5%）であった。医療施設から開口対策のためにあごを縛る 126 人(54.3%)、合掌 147 人(63.4%)、医療施設での死化粧は 3 割程度であった。
　医療者からの感染症に関する情報提供の希望は 226 人（97.4%）、退院後に予測されるトラブルに関する情報提供の希望は 223 人（96.1%）、遺体の変化に関する医療者の知識は 9 割が持っていた方がよいと考えていた。遺体に接触する際の手袋の装着は 5 割、遺体

からの浸出液に触れる可能性がある際の手袋の装着は9割、感染の危険を感じた経験が4 割、自身の感染予防対策について「できている」と評価したのは4割、体液流出のトラブルを経験した人は、感染の危険性を感じていた。

処置への家族参加がグリーフワークにつながると考えている人は、医療施設での冷却、太い点滴チューブ抜去後の縫合が有意に高く、家族参加の声かけを行っていた。家族の対応で困った経験のある人は、開口トラブル、出血トラブルの経験に差がみられ、医療者からの家族への説明が十分でないととらえていた。

退院後の遺体は、外表上の開口や開眼だけでなく、体液流出や出血などのトラブルも多くみられていた。太い点滴チューブの抜去後の縫合の要望が高かったことから、時間が経過してからも体液流出等のトラブルが最低限になるような死亡直後からの処置が必要である。体腔への詰め物など、従来の処置の内容の見直しに対する戸惑いの意見もみられたことから、退院時の家族や葬祭業者への情報提供の必要がある。

家族の参加希望の経験があったのは7割で、4 割は処置に関する家族の対応で困った経験があった。

遺体のトラブルの情報提供は3割程度であったが、家族にとって身内の死を迎えることは非日常的なことであり、退院後の遺体の状況によっては家族の悲嘆過程に影響を及ぼすため、今後は医療職と葬祭業者との連携の充実が課題である。

＜調査３＞

①結果および成果

DVD の内容については、処置の流れのイメージがついたのは 9 割、遺体の変化は 8 割、看取りにおける看護者の役割は9割、家族のケアは7割が理解できていた。トラブルへの対処については理解度が5割と低い結果であった。

看取りの教育については、基礎教育課程における学習内容を検討する必要がある。今回の DVD の内容でも、全体時間を考慮し、死後のケアの中でその概念と身体の整容、家族のケアを中心に構成したが、死化粧へのニーズが高かった。経験がないとイメージができない内容のため、テキストを用いただけでなく、このように映像化された教材を用いることで、理解が深まることが示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

1)小林祐子、清水理恵、死後のケア演習を取り入れた看取りの教育、看護教育、査読有 53 (3)、2012、404－408.

〔学会発表〕（計　３件）

1)小林祐子　看取りの現場における死後のケアの実態、第１回臨床生死学研究会、2010 年 8 月 7 日、東京都.
2)小林祐子、和田由紀子、医療施設から退院後の遺体の現状とケアの課題、第４回新潟青陵学会学術集会、2011 年 11 月 5 日、新潟市.
3)小林祐子、看取りの場における看護職の死後のケアの思い、第 37 回日本看護研究学会学術集会、2011 年 8 月 8 日、横浜市.

６．研究組織

(1)研究代表者

小林　祐子（KOBAYASHI　YUKO）
新潟青陵大学・看護福祉心理学部・准教授
研究者番号：20303232